

---

# Master Out

頬富直人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Master Out

### 【Zコード】

Z0742D

### 【作者名】

頼富直人

### 【あらすじ】

26歳の冬。忘年会の2次会で訪れた初めてのダーツバー。そこで見たダーツの大会のDVD『burn.invitation』<sup>1</sup>。3年後、男はその舞台の上に立っていた。

## プロローグ

手足が震える。

喉が渴く。

吐き気がする。

そんな中、僕は思っていた。

『3年前に初めて見たDVDの舞台に…まさか自分が立てるなんて。

』

何度も経験してきた事なのに、今日もいつもと同じ。  
何度経験しても慣れないものだ。

僕は込み上げる吐き気を、4重に重なった紙コップに入ったウーロン茶で押さえつけ、眩しく光る舞台へと足を進めた。

客席には、1席1万5千円のプラチナシートをゲットしたマニア達。  
そして数人の僕の仲間達。

『ダーツを始めて…本当に良かった。』

僕はそれだけで十分だった。

## レーティング・0 (前書き)

初めてのダーツとの出会い。今から想つとコレが無かつたら、今の自分は無かつた。

## レーティング：0

11月半ば。

「おー寒つーなんか雪が降りそつたさ。…ていうか冷たさですね。

「そうですね、早く2軒目、見つけて入りましょ。」

忘年会には少し早い季節だが、鍋を始めるにはちょうど良い季節だった。

その日は、半年に渡つて携わってきた、制御系システム『FanciOn』の開発プロジェクトの打ち上げだった。

「あ、あそこに『やる茶』がありますよ、あそこにしましょ。」

中村さんはよく自分の話をした。

彼は僕が所属している会社の、協力会社の若手システムエンジニア。ルックスも中身も僕とは正反対の好青年だった。

中村さんと僕は、会社から自宅への帰る方向が同じだったし、同じ開発チームだったので帰る時間が同じになる事も多く、帰りながら話をする事が多かった。

中村さんはよく自分の話をした。

そのせいか、僕は中村さんの幼稚園時代から、今までの生い立ちを大体知っていた。

「…でね、うちの息子が、最寄り駅のホームまで迎えに来ててですね。私を見つけるなり、『ばー』っと走ってきて、私の足に抱きつ

「ふんですか。モー可愛くてしちゃうがないんです。」

「それ、前にも聞きました。可愛いんですね、息子さん。」

「ええ、輝いてますー。」

「一人ともに肩をすぼませ、『やる茶』へ足早に急いだ。

中村さんの話の5割は息子さんの話。

3割はダーツの話。

2割は格闘技の話。

少しだけ奥さんの話。

『やる茶』での会話は5を続き、息子さんの話かと思つたが、違つた。

「とじるで林さん、この後、ダーツ行きません?」

「はい、行きません……って何度も言つてゐるじゃないですか。」

この半年間、会社からの帰り道中、4割の確率でダーツに誘われていた。

僕はその誘いについて10割の確率で断つていた。

「楽しいんですよ、ダーツ。行きましょよ。この店の隣の隣の隣  
くらこにあるんです。ビリヤードも置いてあるから、ダーツが面白  
くなかったら、ビリヤードしましょー。」

「もー、分かりましたよ。行きますよ。中村さんは明日、『自分の会社に戻られるんですね？お付き合いでします。』

Falconの開発については、協力会社の方にも僕の会社内で作業してもらっていた。

半年振りに自社で作業できると、中村さんは喜んでいた。

『やる茶』を出る頃には酒の勢いで、寒さを感じなかつた。中村さんは仕事からの開放感も手伝つて、急いでダーツバーの方へ駆けて行き、すぐに姿が見えなくなつた。

僕は、彼が走っていく先に、ダーツバーがある事は、何となく知つていたので、記憶を頼りに中村さんの駆けて行つた後を追いかけた。

お世辞にもキレイとは言えない雑居ビルの5階にダーツバーがあつた。

カウンターが7席しかないのに、ビリヤード台が3台にダーツ台が4台。

店内はバーにしては広くてだいぶ明るかつた。店には客が5人ほど居たが、誰もダーツを投げていなかつた。

「さあ、投げま jóうか。林さん、ダーツやつた事あります?」

「全然無いです。…これを…投げればいいんですよね?」

僕は店においてある、ボロボロのプラスチック製のダーツを4~5本持つて中村さんに聞いた。

「ダーツは一人3本です。」

「あ、そうなの?..」

「あとハウスダーツじゃなくって、僕の持ってるダーツを借しますよ。」

「あ……ありがとうございます!..」

たまにタメ口。中村さんは僕に対して決してタメ口を聞かないが、僕は誰に対しても、不意な出来事が起きるとタメ口を聞いてしまう。

「まず、カウントアップってのをやります。一番点数が多いと勝ちです。とりあえず、真ん中の円を狙つてダーツを投げてください！」

「……はい。このテープみたいな所から、足をはみ出しちゃいけないんですね？」

中村さんは手馴れた様子でダーツ台を操作していた。  
なにやらダーツは色々とゲームがあるらしい。

「……よつー……よつー……よつー……上手くこかないもんですね。」

「初めてですからね、今度は僕の番です。」

3本中3本目のダーツが真ん中に刺さり、ダーツ台から少し大げさな音が鳴った。

ダーツ台上部にあるモニタには『61』が表示されていた。  
僕のは『27』だった。

「スゲー、中心に入ってる。上手いじゃないですか～。」

「まあ8ケ円投げてますからね。」

何ゲームか投げていると、カウンターの方にある、薄型テレビに映つていた画が気になつたので、聞いてみた。

「…ん？あれってダーツの試合ですか？テレビに映つてるやつ。」

「あ～そうです。日本トップレベルの選手が出てる大会ですよ。」

「へーそんなのあるんですね。」

僕が今投げているダーツ台とは少し盤面の色が違うみたいだつた。どうやらダーツ台には色々な機種があるらしい。

「あれって中村さんよりも上手いんですか？」

「…当たり前です。みんな有名どころの人ですよ。『burn . invitation』っていう大会で、ソフトダーツをしている人達の憧れの大会なんです。」

「なるほど…」

中村さんはダーツが本当に好きなんだなと思った。

その後カウントアップを数回した後、2人でカウンターで数杯飲んだ。

お互い、ビールは飲み飽きていたので、焼酎の水割りを頼んだ。  
飲みながら、彼から借りたダーツを見てみると、金属製の部分に文字らしきものが刻まれていた。

よく見てみると、筆記体で『Facion』と書いていた。  
開発が完了したシステムの名前とダーツの名前が同じだった。  
僕は運命染みたものも、ダーツに対しても興味が湧かなかつたが、  
唯一そこだけに興味が引かれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0742d/>

---

Master Out

2010年10月28日05時11分発行